

# 『潜入』ロリビッチ援交集団

潜入捜査員：平平平平

## 目 次

P 1 : 表紙

P 2 : 目次

P 3 : 人物紹介

P 4～P 7 : 接触

P 8～P 15 : JD をレズアクメするロリ 2 人

P 16～P 24 : 喘ぎ悶えるロリビッチ

P 25 : 巻末

# 人物紹介

平平平平（ひらたいらへいべい）

今回の案件の潜入調査員。ごっつい肩書だがただ見た事をメモって Daishirou に伝えるだけの人。どんな人物かは巻末参照

華恋（かれん）

仮名。逆レイプサークルの代表者で都内にある偏差値が高い某国立大学の4回生。ロリというほどでは無いが実年齢より少し若く見られる顔立ちをしている。背はどちらかといえば低い。反面脱いたら素晴らしい美巨乳と縊れを持つモデル体系。何故か今回潜入捜査員平平に同行しロリビッチ援交集団に共に潜入。

みく

仮名。ロリビッチ援交集団の取りまとめと客と女の子達の中継ぎをしている  
○学生の女の子。父子家庭で市営住宅に住んでいる。  
詳しくは聞いていないが家庭の環境と経済状況は最悪の様だ。  
習い事はやっておらず学校の成績も最悪との事。  
今回の事で潜入捜査員に淡い恋心？を抱いてしまった様で、  
LINE が頻繁に送られて来るらしい。

エミリ

みくと同学年で同じクラスのボーイッシュな女の子。  
バスケットクラブに所属しているそうだ。  
後述の沙耶とはエロ本を見ながら悪ふざけをして一緒に処女を喪失した親友同士との事。

沙耶

エミリと家が近所にある大人しく引っ込み思案なメガネの女の子。  
勉強はできるが運動は苦手らしい。  
…があっちの方はこの年齢では考えられないほど激しく食欲だった。  
本人曰くこの運動は別腹だとか訳の分からない事を言っていた。

## 接 触

ロリビッチ…ロリータとビッチ。この2つの和製英語を組み合わせた造語。

ロリ→ ~意味の記載を自主規制~

ビッチ→あばずれ・ヤリマンなど性に自由奔放で性欲旺盛な女性のこと。

(ただしこれは日本国内のみ。英語では生意気でキツイ女性を指すスラングとして用いる)  
つまりロリビッチとは性欲旺盛なヤリマン少女の事。

エロ用語辞典参照。

こんなロリいる訳ない。2次創作だけの歪んだ存在だ。

だが東京から電車に乗って約40分で行けるS県の某市にはロリビッチがわんさかいる。

しかも、グループを作って組織売春をしているという。

俺は某出会い系サイトを通じて組織のリーダーにコンタクトをとる事に成功。

後日、某市の駅近くにあるカラオケBOXで客として会う事になった。

「で、今日がその日って訳なんだよ」

華恋「だからこのカラオケに来ているんですね」

「ねえ一つ聞いていい？なんで華恋ちゃんがついてきてるの？」

華恋「ウチのサークルをもっと取材してくれるんじゃないんですか！」

「売上げが悪かったんだ。だから他の事を取材しろって言われて…」

華恋「ぶー。納得行きません！」

そんな話をしながら約束の時間より約30分も遅れて、  
一人の女の子がドアを開けて入ってきた。

背は低く、出るべきところはほとんど出ていない。

いかにも〇学生だと分かる少女だ。

顔立ちは〇〇〇〇アイドルと言っても申し分ない程可愛い。

大きくなればきつととんでもない美人に成長するだろう…。

しかし、髪は金髪に染めていて、肌はこんがりとした色黒。服装は派手…。

そんな外見がこの娘の交友関係と家庭環境の悪さを物語っている。

そして、遅れた事を誤りもせずにドカドカと歩いて

俺と華恋の机を挟んで向かい側のソファに座る。

表情は不愛想で不機嫌そうだ。

「君がリーダーの女の子？」

?? 「そうだけど」

「名前は何て言うの？」

?? 「はぁ関係ないでしょ？」

ところでアンタらなに？変態カップル？マジできもいんだけど」

客にこんな言葉遣いをする上に表情も終始不愛想で不機嫌…。

こんな生意気なクソガキとは関わりたくない。

そう思い立ち去ろうとしたその時だった。

華恋「なにその態度。〇〇だからって何でも許されると思ったら大間違いだよ」

?? 「説教？うざいんだけど」

華恋「私たちはお客様だよ。さま、分かってんの？」

?? 「こんな口調でもキモオタやキモオヤジは喜んでウチらを

買っていきま～す。だから問題ないで～す」

華恋「ふざけないでこっちの質問に教えてください。

お嬢さんのお名前はなんですか？」

?? 「……」

華恋「……」

華恋の口調は普通の説教だ。

しかし表情は氷の様に冷たく瞳はゴミでも見るかのように冷淡で冷酷な悪魔の様だ。

彼女は稀にこういう表情を見せる。その顔はすこぶる怖い。

年上で男である俺でさえそうなのだ。

いっぱい悪い事をしてそうだがこの娘はまだ〇学生の女の子、耐えられるはずがない。

案の定、ちょっとのあいだ無言で見つめ合いはしたが

(ガンを飛ばし合ったって言った方が適切か)、すぐに怯えて目をそらし  
つぶやく様な小声で話し始めた。

?? 「…みく (仮名)」

華恋「ありがと。私は華恋。よろしくね」

華恋は万遍の作り笑いを浮かべている。それがまた更に怖い。

「あ、俺は平平平平よろしくね。

早速だけどもみくちゃんは、いつ位からこの組織をやってるの？」

みく「組織なんかじゃない。ただ友達や知り合いでお金が欲しいんで

ウリしたいって娘と、買いたいって気持ち悪い奴の間に入って色々してるだけ。

始めたのは一年いかないくらい前」

「何人くらいいるの？皆どういうつながりなの？」

みく「数えた事は無いけど 50 人ギリで行かないくらいだと思う。

同じ学校のクラスメートや近所の友達 4 人で初めた。

それから少しづつ他のクラスや学年の女の子や塾とかで一緒に他の学校の娘なんか  
友達の友達みたいな繋がりが入ってきて気付いたらこれ位になってた」

「どこまでできるの？」

みく「…女の子次第だけどほとんどの娘がエッチまでできるよ」

「みくちゃんもウリをしたの？」

みく「今でもしてるよ。皆とやり始める前から 1 人でしてたし

ウチが一番長くしてると思う」

「お客さんはどうやって集めてるの？」

みく「出会い系とかテレクラとか」

華恋「うう…平平さん最近の娘は進んでますね。

私なんてロストヴァージンしたの大学に入ってからですよ。

風紀が乱れてて怖いです」

みく「そんな歳まで処女だったのお婆さん。

ウチだったら恥ずかしくて自殺してるわ」

華恋「うるさい！うるさい！もっと貞操観念を持ちなさい！」

みく「ていそうかんねん？何それ？難しい言葉分かんないんですけど」

先ほどの復讐とばかりに弱気になった華恋にみくは強気に出てきた。

しかし逆レイプサークルなんてものを運営している代表者が、  
貞操観念とは…自分のやってる事棚上げして何言ってるんだか…。

みく「で、おっさんとお婆さんはいくら持っててどんな事したいの？」

「…お、おっさん…俺はまだ 27 歳だぞ…まだおっさんでは…」

華恋「私はまだ大学生だよ。お婆さんじゃなくてお姉さんだよ。

言い直してくれるかな？」

華恋は再び万遍の作り笑顔を浮かべる。

みく「十分おじんとお婆んの歳じゃん。どんな事したいの？」

3P したいからもう一人欲しいとかそんなの？」

華恋「…分かったわ。みくちゃん。女の子でも相手できる女の子はいるかな？」

みく「レズって事アブノーマルだね（笑）ウチ含めて経験あるのは 8 人くらいかな。

勿論全員ウリは出来るから安心して」

華恋「そっか。じゃあその女の子達の中で一番上手な女の子と

お姉さん一緒に遊びたいな」

みく「お婆さんウチを買いたいなの？悪いけど NG。

代わりに 2 番目と 3 番目に上手な女の子付けてあげるからそれで勘弁して」

引きつった作り笑いを顔面いっぱい浮かべる華恋と不敵な笑みを浮かべるみく。  
この2人の間にゴゴゴという効果音を俺は挿入したくなった。

みく「おっさんはどうするの？」

正直参った。俺はロリコンでは無いのだ。

かといって買わなければ潜入取材の体験談を報告できない。

「うーん。じゃ、じゃあ一番あっちが上手で尚且つ可愛い娘を…」

みく「おっさんもウチが良いの？はあ人気者は疲れるから辛いわ」

華恋「自分が一番可愛くてどんな相手でもエッチが一番上手いって思ってるんですね。

これだからクソガキは…」

みく「はいはい。じゃあ。女の子呼ぶから先にラブホ行ってて。

この近くに〇〇ってラブホでお願いね。

あそこ豪華で部屋が広いわりに入室チェックが甘いからよく使うんだ」

そう言ってスマホ弄りながら、みくは部屋を出て行った。

「華恋ちゃん。レズの趣味は無いんじゃないの？」

華恋「好きでは無いですけどサークルの娘たちと

スキンシップみたいな感じではよくはします！

あんなクソガキ共なんか逝かせまくって大人のテクニックと魅力と威厳を

たっぷり身体に教え込んでやるです！」

何がしたいのか言ってる事はよく分からないが

悔しかったので性的な意味での仕返しをしたいようだ。

そんな華恋を横目に俺はある事が気がかりだった。

ロリ3人に豪華なラブホ…今回の潜入取材いったい金はいくらかかるのだろうか…。